

「終わりなき終わりの此方と彼方

—有限性をめぐる人間と神に関する一考察—

片柳榮一（聖学院大学）

人間の有限性を端的に示すものは、「死」という事実である。死の根本にある不気味さは、その終わりがもつ独特の性格にある。我々の知る日常の終りは、次に何かが始まる終わりである。一つの話の終わりは、次の話の始まり、或いは沈黙の始まりである。夜の終わりは朝の始まりである。我々はいつもそうした連続の中にある。しかし死が「終わり」であるという時、死が不気味さをもって現れるのは、端的な終わり、その先に始まりのない「終わり」に面するからである。我々はそうした「終わり」を経験的には知らない。我々が知っているのは、次に始まりのある終わりだけである。だから「死は終わりである」と悟り澄まして言うとしても、この「終わり」という言葉が何を意味しているのか、実は少しも分かっていないのが実情であろう。何か意味の分からぬことを口走っているにすぎない。

この「終わり」がもつ不気味さを言い表そうとすれば、「次が始まらない終わり」、或いは「終わりがいつまでも終わらない終わり」といささか苦しく、ぎこちない表現を使わざるをえない。我々の時間感覚は、連続を要求する。終わりの次にくるものを要求するが、死においては、次はなく、終わりであり終わりである。しかし我々はそれで終わることができない。この終わりの前で、先に進もうとして「終わりが終わらない」というしかない。そこで我々は死の不可解で不気味な相貌に直面するのであるが、同時に終わりで終わることのできない自己そのものの不可解さに直面している。

「終わりなき終わり」とは、ヘーゲル的には、本来的でない悪無限であると言われよう。またカント的には、人間的な直観の形式にすぎない時間の基本要素としての「継起」を、不適切にも端的な「終わり」に当てはめたにすぎない詭弁だ、と言われるかも知れない。究極的には不適切であることは認めるとしても、死のもつ非日常的な異様さ、不気味さを表すために、そしてそこから示される我々自身の存在の不可解さを肝に銘じるために、敢えてこの表現のもとに留まりたいと思う。

『存在と時間』の中でハイデガーは死を徹底して「可能的なるもの」として取り出そうとする。「死は現存在の端的な不可能性の可能性である」(Bd.2,S.333)。死が純粋な可能性において捉えられることによって、端的な現存在の不可能性としての「終わり」が遍く及ぶ。「終わり」は可能的であることによって、偶然的に制限するあらゆるものを突破して行く。

先駆（Vorlaufen）とは、この可能的なるものもつ否定の力があらゆるものを刺し貫くことを意味している。「終わり」がいわば無限の相貌を呈する。先駆的覚悟性の要請とは途轍もないものである。終わりなき終わりという全体としての無、永遠の無を引き受けよと言うのであるから。

『哲学への寄与』においても死への思索は根本を貫いている。「死は「現」の極限 *das Aeusserste* のものとして、同時にこの現の可能的にまったき変貌の最も中核にあるものである。そして同時にこのうちに無というものの最深の本性への指し示しがある」（Bd.65、S.325）。ハイデガーが「真有 *Seyn*」を如何なる有るもの *Seiendes* でもなく、有るものに対して最も尋常ならざるものと言ひ、さらに無は真有に属するという時、彼が見据えているのも、死という現象を透かして見えてくるものである（S.480）。

西田幾多郎の最後の論文での死への眼差しは凄絶ともいえる。彼は永遠の死と言う。「自己の永遠の死を自覚すると云ふのは、我々の自己が絶対無限なるもの、即ち絶対者に対する時であらう。絶対否定に面することによって、我々は自己の永遠の死を知るのである。併し単にそれだけなら、私は未だそれが絶対矛盾の事実とは云わない。然るに、かく自己の永遠の死を知ることが、自己存在の根本理由であるのである」（岩波旧版全集、XI,395頁）。まさしくこの自己が永遠の死に臨むこと、それが、自らが存在することの根本理由であるという。このことは少し前の「物理の世界」では、次のようにも表現されている。「それは全世界を否定することによって自己自身が成立する、即ち自己から世界が始まる、創造的であると云ふことであると共に、永遠なる自己消滅の約束に於て自己が成立するといふことでなければならぬ。一度的にして永遠に消去することが、全体的一の唯一の事として永遠なる所以である」（XI,9）。死をやむを得ず引き受けなければならぬものとして覚悟することまでは、我々にも辛うじてできるかもしれない。しかし西田は、永遠の死に臨むことそのことが、自らが存在することの理由であり、自己消滅の約束において自己が成立するという。一度的にして永遠に消え去ることが、まさしく永遠的ということであるという。

西田が心霊上の事実としての宗教という時、こうした永遠の理解を背景にしている。「相対が絶対に対するといふ時、そこに死がなければならぬ。それは無となることでなければならぬ。我々の自己は、唯、死によってのみ、逆対応的に神に接するのである」（XI,396）。我々は、今、このような神に何処で接するのであろうか。終わりなき終わりの此方であらうか、彼方であらうか。